

女子大学生の自立意識・親子関係意識について

——離家の有無の観点から——

Awareness of self-reliance and consciousness of parent-child relationship among female university students

- From the viewpoint of existence of leaving home -

富永 紗央

人文科学研究科臨床心理学専攻

Sao Tominaga

Division of Clinical Psychology, Graduate School of Humanities, Atomi University

要 約

これまでは離家（親元から離れること）が自立だという規範的前提が若者研究には存在したが、現代社会ではその枠組みの有効性が問われている。また大学生は自立において親子の距離によって親子関係は大きく変化する。だが学生を対象に離家の有無による親子関係や自立意識の差異を検討した論文はまだ多くないため、離家経験者・非離家経験者の8名の学生にインタビューし検討した。その結果、離家経験者からは①大学進学・自己成長・地元環境の圧力からの離家動機、②親との離家による丁度いい距離感、③母への親密性と尊敬心、④父への客観視による変化の有無、⑤将来不安と親への甘えの5つ、非離家経験者からは①母親との親密な関係、②父への進まない再評価、③離家を躊躇する親への甘えと就職活動による変化の3つが考察された。また両者間の差異として、①離家経験者は非離家経験者に比べ、親子関係の中で母親との親密な関係や父親の再評価など離家の前後で気持ちに変化が存在、②離家経験者は大学生活の中で緩やかに自己成長し、自立へ向かっていくのに対し、非離家経験者は就職活動の時から急速に自立への気持ちが加速して形成されていく、という2点が推察された。

I 問題と目的

1. 日本における離家の変化

若者が親元を離れることを「離家 (home-leaving)」という (国立社会保障・人口問題研究所, 2016)。米村 (2008) によると、これまでは離家 (親元から離れること) の遅れを自立の遅れと見る視点が代表的であった。若者は成人したら離家すべきであり、それが自立だという規範的前提が若者研究には暗黙に存在しただろう。し

かし、離家と大人への移行の関係が複雑化、多様化している現在、その枠組みの有効性が問われている。昨今、大学進学を機に親元から離れ、一人暮らし・寮生活を始める若者も増え、大学でも離家経験をしている学生が一定数いる。独立行政法人日本学生支援機構 (2016) によると、大学で自宅居住の学生は56.5%、学寮居住の学生は5.5%、アパート等に居住する学生は38.0%となっている。

2. 大学生の自立意識と親子関係意識

高坂（2003）によると、自立という概念は、精神的自立、経済的自立（安定した収入）、社会的自立（結婚、年齢など）を含んだ概念として定義することが多かった。その自立について、大石ら（2006）によると、大学生は自立を経済的・心理的・社会的・生活的自立という複合的な概念としてとらえてはいるが、経済的自立が最も強く意識されている。また記述方式の研究の中で、「親元を離れて生活する」「親と自分とを同一視しない」「家族とのよい関係を維持する」など親との関係に焦点をあてた記述が多いのも特徴的であったと述べている。このことから、大学生は、自立と親を結びつけて意識していることが多いと考える。また米村（2008）によると、良好な親子関係を可能にしている要件の一つは、彼らなりの自立意識と親とのほどよい距離であるという特徴が浮かび上がってきた。距離の取り方によって親子関係は良好になったり、息苦しくなったりしている。このことから、離家をするという物理的な距離があることにより、親子関係の意識変化が考えられるだろう。だが、学生を対象に離家の有無による親子関係や自立意識の差異を検討した論文はまだ多くない。

3. 本研究の目的

そこで本研究の目的は、親子間の物理的距離が近い実家暮らしの学生と、親子間の物理的距離が遠い離家をしている学生に親子関係意識と自立意識を問い、両者の間に考え・意識の差異があるか検討をする。

本研究で自立・親子意識についてどう感じているか語ってもらうことで、経済的自立・社会的自立が基本的には不可能な学生

時代における現代の若者の離家への意識について、事例的にはあるが捉えることが出来、一つの基礎的資料となるだろう。また、パラサイトシングルをはじめとした離家しない若者の研究にも、基礎的資料の一つとして、つなげることが出来ると考える。

II 方法

1. 調査期間

2018年8月～9月

2. 調査協力者

女子大学生の離家経験者（大学入学以前は離家経験がなく、大学入学後一年以上一人暮らしをしている女子大学生の方）、女子大学生の非離家経験者（現時点まで一度も離家経験の無い、大学入学から一年以上経過している方）で調査募集に協力して頂ける旨のお返事をして頂いた方をお願いした。

3. 面接調査

面接内容はICレコーダーにて記録し、50分程度の半構造化面接を行った。離家（親元を離れること）経験者には、①離家する前の家族構成②離家する前の親との関係について③離家する前の自立意識について考えていたこと④離家するに至った経緯⑤離家を始めて以降、最近の親との関係や、学校の入学の前後の親子関係の変化について感じていること⑥離家を始めて以降の自立意識について感じていること。非離家経験者には、①現在の家族構成②最近の親との関係や、学校の入学の前後の親子関係の変化について感じていること③自立意識について感じていることを質問した。

4. 分析方法

面接時に調査協力者の了承が得られた電子情報を逐語記録媒体として文字に起こした。その後、筆者が解釈的現象学的分析（interpretative phenomenological analysis：以下IPAの略記）を用いて内容の検討を行った。IPAは必ずしも以下のステップを要するとは記載されていないが、伊賀（2013）の示した分析の4ステップを主に採用した。4ステップとは以下の通りである。①データの読みと読み直し：複数回逐語記録を読み、インタビューの構造が全体でどのようになっているのか、また特定の部分がつなぎ合わされてどのような物語が構成されているのかを読み取る。②ノートとり：話者の話の内容、特殊な言語使用（とりわけメタファー）、そしてそれらについての分析者の概念的解釈などを書き留める。このノート付けのプロセスではトランスクリプトの行ごとのコーディングや意味単位ごとのコーディングは行わず、分析者の観点で自由なテキスト分析を行う。このノート付けには記述的コメント、言語学的コメント、そして概念的コメントの三種

類のコメントがつけられる。コメントはトランスクリプトの右側の余白に書き込む。③浮上するテーマ：ノートの方により重点が置かれ、コメントの細部を縮約し、コメント間の相互関係や結びつき、そしてパターンを発見する。そのパターンを元に概念的な抽象度を上げたテーマを書き留める。④浮上した諸テーマ間の結合関係の発見：諸テーマ間の結びつきを発見し、共通しているテーマをもとに群を作る。また、諸テーマを配置して、それらの間の結合関係を表示した図を作成する。これらの手順を踏み、逐語記録を個々に分析した。

5. 倫理的配慮

本研究は跡見学園女子大学研究倫理審査委員会において承認を受けた（認証受付番号18013）。

Ⅲ 結果

1. 基本情報

調査対象者の基本情報は以下のとおりである。

表1 調査対象者の基本情報

調査対象者	離家経験の有無	現在の暮らし方の種別	大学での学年	(離家前の) 同居家族
A	有	一人暮らし	大学4年生	A、父、母、弟、妹
B	有	一人暮らし	大学3年生	B、母、兄
C	有	寮暮らし	大学3年生	C、父、母
D	有	寮暮らし	大学3年生	D、父、母、兄
E	無	実家暮らし	大学3年生	E、父、母、妹
F	無	実家暮らし	大学4年生	F、父、母、長弟、次弟、祖父、祖母
G	無	実家暮らし	大学3年生	G、父、母、兄
H	無	実家暮らし	大学2年生	H、父、母

2. 半構造化面接の結果

これは全員に行った半構造化面接の結果である。A、B、C、D、E、F、G、Hそれ

ぞれの半構造化面接の結果を要約表にし、いかに結果の詳細を記述する。上位テーマを【 】, テーマを《 》、インタビューに

おける言葉を用いる場合には「 」で示した。また離家経験者は①離家・大学進学前、②離家・大学進学後の2つの時系列に分けて記述する。非離家経験者は①大学進学前、②大学進学後の2つの時系列に分けて記述した。

3. Aさんの結果

19のテーマが抽出され、それらが5の上位テーマにまとめられた。

(1) 離家・大学進学前

【妹の出生による家族をめぐる葛藤】では、《妹が出来たことによる不和》が生じたが、一方で《家族の結束力の高まり》も生じた。そのため、《離家する抵抗感はなく、離家への強い気持ち》を持っていた。《母への純粋な驚き》がありつつも、《父の浮気による母の苦悩を理解》し、《自分と父の性格の類似による不仲》もあって、《母への擁護心》があった。【早期自立を促す地元環境を巡る想い】では、地元環境での《社会からの自立を促す圧力》により《社会的圧力に対する怒り》があった。

(2) 離家・大学進学後

《離家により母の不義による妹の出生を受け入れ》ができた。また《家の状況を客観的に見れるように変化》し、《母の妊娠による父の苦悩を理解》出来るようになった。また現在行っている就職活動についても【家族に応援されているという感覚に嬉しさ】を感じている。離家前は、地元の悪口の言い合いへの嫌悪感があったが、【悪口は自身への信頼とポジティブに認識】出来る様に変化があった。また《自分の体力的精神的な限界ラインを社会人前に把握》することで、《親や社会人を尊敬する気持ちの芽生え》があり、その結果《人

に優しくなれた》。また離家には《自分で親に対する情報制限が出来る気楽さ》を感じている。《自分に対する妥協心の芽生え》や、《失敗経験から自己を知る》ことで、《自分への負荷調節》を知ることが出来たと【離家をして気が付いた離家のメリット】があった。

4. Bさんの結果

15のテーマが抽出され、それらが10の上位テーマにまとめられた。

(1) 離家・大学進学前

【幼少期の父母を巡る想い】では、兄・父・自分の三人で過ごした時間を思い出し、《母のいない空間のさみしさ》から《父親では母親の代わりになれない》ことを感じていた。その後、【親の離婚による母子家庭】となった。【離家開始までを巡る過程】では、《興味分野への強い関心からより良い大学を選択》し、《通学と離家で金銭的に安い離家を選択》した。離家については、《条件を提示しつつも離家を応援された》感覚があり、《自由に過ごせるという楽観的な気持ち》で離家に至った。また【大学進学に価値を見出していない父に対する呆れ】を感じていた。一方で【母の一つ一つの行動にイライラ】も感じていた。

(2) 離家・大学進学後

【離家前との違いと後悔】では、離家により《親の有難みを痛感》した。【母の行動に対する考えの変化】では、離家により《母の行動をポジティブに捉えられるほど心に余裕ができた》ことで、《母の絶やさない笑顔を尊敬》する気持ち、《母への過去の自分の態度に後悔》をする気持ちが生まれた。【離家後の幼少期の父母を巡る想

い】では、両親の離婚により《大変な中幼少期を育ててくれた母への有難みを実感》する一方、《大変な時期に出て行った父に対する怒り》を抱えている。将来については、【明確なビジョンがない将来に焦り】を感じている。【母との距離を巡る想い】では、母との距離感として《離れているくらいがちょうどいい距離と認識》する一方で、実家で過ごした後《帰省から戻ってきた夜の寂しさ》があることから、《近いと苛立ち、遠いと寂しい母との距離》を感じている。

5. Cさんの結果

26のテーマが抽出され、それらが11の上位テーマにまとめられた。

(1) 離家・大学進学前

【両親の離家の賛成と進学】では、《両親の離家への賛成》と《自分の将来を探すための進学》が重なり離家を考えて。だが、《地元の離家への反対》があり、《地元の人に対する嫌悪感》を持っていた。同時に《親身になってくれるという印象》もあり、離家に関して【地元環境を巡る葛藤】を抱えていた。友人に比べ《家族で過ごす時間が多い》こと、《自分に尽くしてくれる両親》の存在から、《親からの愛情が自分一人へ来ることへの重み》を感じており、【家族密着の状態】があった。それが【寮生活を選択するまでの想い】につながり、《一人暮らしで起こるだろう日常生活の不安》や《両親は一人暮らしは不可だが寮は許可》という条件付きの離家の許可があった。そして、《交流が広げられるというメリット》、《寮生活への期待》により、寮を選択した。【自立に対する自分への焦り】もあり、《このままの自分で大人にな

るという焦り》や《一人では何もできない自分自身に対する焦り》から離家に踏み切った。

(2) 離家・大学進学後

離家前はポジティブイメージの多かった寮生活だが、【友人たちと早めに別れなければならない門限の辛さ】というネガティブ面も実感した。【アルバイトで感じた自己成長】として、《自分で得た給金の嬉しさ》や、その給金で買った《親へのプレゼントから自己成長を実感し自信》に繋がった。一方で【両親からの金銭的援助を巡る想い】として、《親への感謝の気持ち》や《両親からの仕送りの申し訳なさ》を感じるようになった。【親の居ない環境への自信】では、離家により《親への甘えからの脱却》、《両親に頼らない生活に自信》、《親への心理的密着からの自立》を感じた。一方で、《将来の仕事への不安》から《大学卒業後は地元へ戻りたい》と【親への残る甘え感情】も存在する。だが、親への甘えの気持ちだけでなく、《本心を語り、一番信頼を置くのは両親》と気づき、離家により《置いてきた両親への心配と申し訳なさ》から、《両親の役に立ちたい気持ち》が生まれ、【親との新たな関係性の構築】のため地元へ戻りたい気持ちがある。

6. Dさんの結果

18のテーマが抽出され、それらが7の上位テーマにまとめられた。

(1) 離家・大学進学前

【家族関係と離家への不安】では、《両親間の不仲》がありつつも、《父親との良好な父子関係》、《お互いに依存しあう母との関係》があった。《離家に反対の気持ちを持っていた両親》がいたが離家をする形と

なり、《離家時の置いていく両親に対する不安》を抱えていた。また母親に【距離が近いと嫌な部分が見えてイライラする】と感じていた。【友人の様子から早期自己決定をせまられる】ことでは、《周りの自己決定の速さに焦り》を感じていた。《将来の夢をかなえる学校を選択》したものの、その夢は《自分の本心からの気持ちか不安》を感じていた。【自己成長のための離家への気持ちの変化】では、《地元から出ないという強い気持ち》を持っていたが、《地元に住っては自己成長できない》、《自分に自信を持ちたい》と感じたため、《まず踏み出そうと強く決心》をした。

(2) 離家・大学進学後

【離家による自己成長への自信と新たな気付き】では、《夢への情熱により心における母の割合が減少》し、《母への依存が減ったことによる自信》から《離家して最低限強くなれた》と感じており、親や地元への有難みを感じられるので《会いたいと思う距離が丁度いい距離》と認識している。離家当初は【離家生活にポジティブ面の期待が強く、不安は少ない】状態だったが、《自分の将来に強い不安》が起き、《家に帰りたいたいという気持ちが強まる》状態になるという【将来不安による甘え感情の復活】が起きている。

7. Eさんの結果

20のテーマが抽出され、それらが7の上位テーマにまとめられた。

(1) 大学進学前

【類似面の多い母への依存】では、《他者評価を気にする母と自分》というような、《性格の似た母への信頼感と依存》を持っている。【両親の不和による悲観的感情】

では、《両親間の不仲》から《ギクシャクした実家に諦め》を持ち、同時に《母の結婚生活から受けた結婚への悲観的感情》を持った。【父への性格相違による不一致さと憤り】では、《父の一貫しない考え・発言への怒り》、そのような《出来事の積み重ねによってできた父との険悪さ》、《父と性格の相違による合わなさを認識》し、《父の問題行動から生まれた男性全般への不信任》、《父に対する人間的な不信任》を持った。他にも《考えを修正できない父への怒り》や、《妹との対応差を作る父への拒絶感》も感じている。また【対人関係構築の苦手さ】を感じていた。

(2) 大学進学後

【父への反抗と身体的距離の設置】では、《支配的な父の言葉に対する対抗心》を持ちつつも、《父とは身体的距離を取ることでは対処》している。【将来を巡る上で感じる思い】では、《自分の原動力が父たちへの憎しみ感情で動いているのではないかという考え》に心配や《人生に対する辛さ・不安》を抱えている。だが、《物理・金銭面による離家への躊躇》心を持っている。また《離家後の母に対する心配》を抱えてもおり、《離れざる状況下でもないという認識による離家への踏み切れなさ》を持ち、《一人暮らしの難しさを逃避できる母親への甘え》があることから【離家への踏み切れなさ】がある。

8. Fさんの結果

17のテーマが抽出され、それらが6の上位テーマにまとめられた。

(1) 大学進学前

【理想の父親像とは異なる父への憤り】では、《父親の整合性のない発言と行動へ

の怒り》、《父親に人間として感じる違和感と不信感》があり、《反面教師な尊敬できない父親》と感じている。一方で《嫌いで無いが、距離が近いとイライラしてしまう父との関係》という感覚もあり、《存在よりお金という父への認識》も存在する。【母への面倒さと労い】では、《現実を見るお金にヒステリックな母の面倒さ》を感じつつも、《お金を持っていない重要人物の母への苦労の労い》という気持ちも持っている。【積み重ねた日常生活から感じる家族像への葛藤】では、《祖母の日常行動への怒りによる自分の性格変化》が起き、《心理的・金銭的対価のない家事への辟易した気持ち》を持っている。そのため《理想の家族像と現実の家族像の差に葛藤》があった。

(2) 大学進学後

《酷い方向に変わらない親子関係》と感じている。【一人暮らしへの印象】では《金銭感覚面での自己成長が出来る》、《社会を見れる》ということにメリットを感じている。【就活による離家への意識変化】では、《就活当初は甘え・不安により離家の検討不可の状態》だったが、内定を貰った企業が離家必須の状況であったので、《視野の広がりと共に自己安定のための離家を検討可能に変化》した。そのため《家と距離を取った方がストレスが減り、物事を冷静に判断できる》という考えが生まれたり、《就職による離家の理由が出来た嬉しさ》を現在感じている。今後は【外に出て親と人間としての関わり方を検討したい】と考えており、離家を前向きに捉えている。

9. Gさんの結果

20のテーマが抽出され、それらが7の上位テーマにまとめられた。

(1) 大学進学前

【母親と自立を巡る反発心と甘え】では、《母親から自立の促し》をされたが、《母との合わない自立感》から《自分の中にある甘えの気持ち》が刺激され、《見放されたような寂しさ・反発心》を持っていた。父に関しては《父親への反抗と嫌悪感》を持ちつつ、自分の《反抗にも態度を変えない父への好ましさ》も持っており、【父への相反する感情】があった。【離家を巡る葛藤】では、自身の心の中で《自立心と甘えで葛藤》をしていたり、「まだ学生だし、経済力無い」ので《離家をしたいの出来ない葛藤》があるのに母から小言と言われるため、《葛藤への理解の無さに苛立ち》を感じていた。そのため、【大切に葛藤が激しい家族という印象】と感じている。

(2) 大学進学後

【兄との関係から巡る家族への苛立ち】があり、兄の障害から《母の自分と兄との対応差に苛立ち》を感じている。その母の態度を父に相談したが取り合われず、《母の性格を改善させてくれない父への失望》があった。そのため《母との関係では自分が我慢》をしている。一方で【父への尊敬心と信頼感】があり、《全てを受け入れる態度を貫く父を尊敬》し、《社会経験の豊富な父への信頼感》を持っている。【自立を巡る家族への甘えの薄れ】では、《心理的・経済的に少しずつ自立》し、《自由な一人暮らしに対する憧れ》の気持ちを持っている。一方で《家族の負担を減らすために自立したい》という気持ちも生まれてい

る。《子どもの頃の記憶に呼び起こされる親への甘えの気持ち》もあったが、《就職活動による視野の広がり甘えが減少》し、《薄まる家族への甘え》が起きている。

10. Hさんの結果

18のテーマが抽出され、それらが4の上位テーマにまとめられた。

(1) 大学進学前

【自身の経験と家族を巡る想い】では、自分の両親は《理解があり、かかわりを持ってきている両親》であり、母については《些細な悩みでも相談できる存在の母》、《よき理解者である母》と感じていたり、父については《わだかまりが消えなかった時に相談するラスボスのような存在の父》と感じている。そのため、《良いと感じる親子関係》だと感じている。【失敗体験による人生選択への不安感】では、《高校・大学受験の失敗による人生不安》から《現在の人生は失敗している最中という考え》を持ち、《失敗経験から人生選択に焦り》を感じている。

(2) 大学進学後

親子関係では《両親のかかわり方が自己決定を促すスタンスに変化》した部分がある。【離家を巡る葛藤】では、《自己決定の生活に憧れ》の心を持っている。だが反対に、《親への甘えたい気持ちの存在》がまだあり、《離家したい強い気持ちはない》とも感じている。【未来の親と自分を巡る不安と決意】では、《アルバイト先の同僚の不安定な仕事事情に不安》を感じており、また《親の定年退職と自分の卒業時期が重なる不安》から《安定した仕事を選択したい》と強く思っている。一方で自身の

失敗体験から《自分の行ける最高点を目指したい》とも思っており、《一人でも生きられるようにという自立心》を持っている。また《親を背負う覚悟》も持っている。

IV 考察

1. 離家経験者の経験から

(1) 大学進学・自己成長・地元環境の圧力からの離家動機

参加者の離家経験の差を少なくするために、大学進学時に離家をスタートさせた離家経験者ということで限定し募集したため、大学進学というきっかけは全員に共通して存在した。他の語られたきっかけとしては、Bさんの《興味分野への強い関心からより良い大学を選択》した結果、Cさんの《一人では何もできない自分自身に対する焦り》、Dさんの《地元に住っては自己成長できない》気持ち、《自分に自信を持ちたい》等の気持ちがインタビュー内で語られたが、このような自己成長への期待の気持ちから離家をする部分もあった。一方で、Aさんは【妹の出生による家族をめぐる葛藤】から離家を選択したと語られた。北村（2000）によると、親元に同居する成人未婚者の3大離家動機は親への甘えに対する自制心、ひとり暮らしへの関心、自由な生活への欲求であるとされているが、この親の甘えに対する自制心が自己成長の気持ちとしてあらわれ、葛藤に息苦しさを抱えている状況から自由な生活への欲求が生じたとも考えられる。

また地元環境による自立の促進もあり、Aさんは《社会からの自立を促す圧力》、Dさんは【友人の様子から早期自己決定をせ

まられる】など、周囲の環境から自立を触発されるということが起こった。Cさんは逆に《地元の離家への反対》があったと語られたが、両親の離家への賛成や自身の自己成長への気持ちがあったことから、その反対意見がより離家を促進する部分もあったかもしれない。

(2) 親との離家による丁度いい距離感

Bさんの《母の一つ一つの行動にイライラ》することや、Dさんの【距離が近いと嫌な部分が見えてイライラする】ことといった離家前の家族の距離の近さに対するイライラがあったと離家前の家族関係では語られていた。一方離家後は、Bさんは《離れているくらいがちょうどいい距離と認識》やDさんの《会いたいと思う距離が丁度いい距離》という発言があるなど、離家による一定の距離の開きをポジティブに捉えていた。Aさんは離家による身体的な距離感の開きにより、「これは言うべきことかな、言わなくていいことかなとか、言ったら怒るかなとかも隠さなきゃってよりは言わなくていいや」と自身の日常生活の「親に対する情報も選んでいける」ことが出来ると語っており、そのような日常生活の一つ一つの行動に対する親からの注意や、自分の予定に対する情報提供の度合いが、距離の開きによって緩和され、それが家族の良好な関係にもつながっているだろう。

(3) 母への親密性と尊敬心

Aさんは離家前から家族に対して大きな葛藤を抱えつつも、母に対して大きな悪感情を持つことなく、離家前から《母への擁護心》があった。Bさんも《近いと苛立ち、遠いと寂しい母との距離》感があり、

Dさんも《お互いに依存しあう母との関係》があるなど、母親との親密な関係が存在した。母親と娘の関係は緊密である（野口ら、2018）といわれており、本調査でも母親と娘の心理的距離の近さがうかがえた。娘にとって母親は同性の親であるため、相談することや共感することが多く、それを母親への依存と捉えている人もいた。母親にとっては同性の子どもであるため自分のよき理解者として捉え、両者は親密な関係を築いているのであろう。またAさんは「家事とかして初めてお母さんってすごいんだな」と《親や社会人を尊敬する気持ちの芽生え》を感じたり、Bさんも家事を休まず続けながら常に笑顔でいた、《母の絶やさない笑顔を尊敬》する気持ちが生まれたり、母親と一歩距離を置いたことにより、家族の良好な関係を形成する一部分でもある、尊敬心が生じたとも考えられる。

(4) 父への客観視による変化の有無

Aさんは離家をしたことで、父を怖く思う気持ちや怒りの気持ちでフィルターをかけることなく《母の妊娠による父の苦悩を理解》できたとある。野口・市川（2018）によると、女子大学生の父娘関係は離れて暮らすことによって父親を再評価できるとあり、Aさんはまだ父親への再評価までは至っていないが、その過程であるとは考えられる。一方でBさんは《大変な時期に出て行った父に対する怒り》が強くなった。野口・市川（2018）では、父親の再評価について、反抗期とその反動での関係の変化、実家にいた頃の関係の薄さ、大学生になり近くなった関係、離れて良好になった関係、離れたことによる心境の変化、昔よ

りは良好な関係、対等な関係、コミュニケーションのある関係、コミュニケーションの楽しさといったポジティブ面の再評価が多く行われていたが、評価とは物の価値を高く付けることだけでなく、物事・性質・能力などの良し悪しを調べて価値を定めるという意もあるので、最初の位置よりよりネガティブに評価をするという面では、ある意味Bさんも父親への再評価が行われていると考える。だが、これは母親への感謝の対比として現れている部分も存在すると考えるべきであろう。このように、本研究では再評価に大きな個人差が存在した。また、父親に限定した気持ちが、インタビューの中で語られない人もいた。これは、まだ父親に関しては母親よりも薄い関係と感じているから、語りが出なかった部分もあるのかもしれない。

(5) 将来不安と親への甘え

Bさんは《帰省から戻ってきた夜の寂しさ》があること、Cさんも将来の仕事への不安から《大学卒業後は地元へ戻りたい》と語っていること、Dさんは【将来不安による甘え感情の復活】があることから、三人とも離家後に甘えが残っていたり、復活したりする部分があった。定まっていない未来展望や、将来の仕事への不安から親へ甘えたい気持ちが高まっている部分もあり、将来という大きなストレスから親へすがってほしいという気持ちが触発されているのだろう。一方で一学年上であるAさんは就活生になり、《家族に応援されているという感覚に嬉しさ》を感じていることから、就活生という枠に入ればこの甘えが引いていく可能性も大きいかもしれない。

2. 非離家経験者の経験から

(1) 母親との親密な関係

Eさんは《性格の似た母への信頼感と依存》、Hさんは《些細な悩みでも相談できる存在の母》と母親との親密な関係が存在した。しかし一方で、Fさんは《現実を見るお金にヒステリックな母の面倒さ》を感じていたり、Gさんは仲が良い時期と悪い時期の差が大きく、《男兄弟に近い母親との関係》と語っていたりするなど、よき理解者である親密な関係とは言い難い関係性もあった。Eさんは母との性格類似面が多いと語り、Hさんは《よき理解者である母》と語ることから、日常生活内でのEさんの母との関係の難しさやHさんのような母との衝突が少ないために親密性が生じていると考えられる。

(2) 父への進まない再評価

Eさんは【父への性格相違による不一致さと憤り】から《父とは身体的距離を取ることで対処》しているが、《支配的な父の言葉に対する対抗心》があるなど、父へのアグレッションは根底に残っている。Fさんも《酷い方向に変わらない親子関係》と語ることから【理想の父親像とは異なる父への憤り】がまだ残っている。野口ら(2018)の、女子大学生の父娘関係は離れて暮らすことによって父親を再評価できるという観点から考えると、離家していないことで父親への再評価が進まないためアグレッションが強く語られていると考える。一方で、Gさんは嫌悪感と好ましさという【父への相反する感情】があったものの、大学進学後の現在は【父への尊敬心と信頼感】が大きくなっている様子が見られる。Hさんは元から《わだかまりが消えなかった時に相談するラスボスのような存在の

父》と元から強い信頼感が存在した。そのことから父親への再評価は離家だけが全てではなく、他の要素も大きく作用していると言える。

(3) 離家を躊躇する親への甘えと就職活動による変化

Eさんの《一人暮らしの難しさを逃避できる母親への甘え》やGさんの《子どもの頃の記憶に呼び起こされる親への甘えの気持ち》、Hさんの《親への甘えたい気持ちの存在》、またFさんの「最初は家から通える範囲がいいなと思ってた」という語りなど、離家に踏み切れない理由はどこかに親への甘えの気持ちが残っているからだと推察できる。だが、就職活動という多くの大学生が経験するライフイベントにより、Fさんは《視野の広がりと共に自己安定のための離家を検討可能に変化》し、Gさんは《就職活動による視野の広がりで甘えが減少》と離家を意識し、甘えが減少した。「インターンとか色々行くようになって、社会人のいきいきしてる姿をみると、あ、楽しそうだなって。まだまだ私の世界って狭いんだなって思う」と今まで身近に感じなかった社会および社会人というものに触れ、視野の広がりがあった結果、そのような変化が起こったと考えられる。

3. 離家経験者と非離家経験者を比較して

(1) 親子関係

野口ら(2018)によると、一人暮らしをしている女子大学生は、一人暮らしをしていない女子大学生よりも、精神的自立のために必要な親との信頼関係を築いているとされている。本研究での信頼関係までの考察は難しいが、離家経験者は離家前の自身と親との関係に対し、家庭内の問題に関し

て親と向き合えなかったり、日常生活内での行動にイライラしたり、存在の近さに重みを感じたりなど、それぞれ難しさを抱えていたが、親との距離の開きにより、離家後は親との離家による丁度いい距離感を身に付け、ポジティブに変化したと語られている。また一部の人は、母に離家によって尊敬を感じたり、ポジティブ面・ネガティブ面の相違はあれど、父親への再評価があった。このように、離家経験者は離家の前後で気持ちに何かしらの変化があったと語られることが多かった。一方で、非離家経験者は、母に対して親密性を持っている人が居る一方、よき理解者で親密な関係とは言い難く、アグレッションを感じている関係性もあった。父に対しても、一部の人は強いアグレッションを大学入学前より持続して持っており、大学進学後も大きな変化は無いと語る様子もあった。離家経験者が離家前の親子関係のネガティブ面をポジティブに捉えなおしたり、変化を感じたりしている一方で、非離家経験者はアグレッションを持続して持っている様子や、親子関係での変化の語りが少ない。そのため、ネガティブ面はネガティブ面として継続して捉えていた。このことから離家が与える親子関係への意識変化は大きく、親子の距離の開きにより、ネガティブ面をポジティブに変化させて捉えることができる心理状況を、離家というものが作れる状態に変化させることが出来ると考える。

(2) 自立意識

離家経験者は、離家によって大学生活の中で緩やかに自己成長し、親に頼らない生活に自信を持ったり、生活面・金銭面等で失敗をしたりと、失敗をしながらも、どこ

かで自己成長した自分を感じていた。一方で非離家経験者は親元から出る必要性をあまり感じられないという面や金銭的に家を出られないという面もあり、親への甘えや不安が強く残っていた。しかし、就職活動というライフイベントにより、非離家経験者も離家という選択が今までの人生の中で非常に身近になってきて、甘えの気持ちが薄れ、不安が治まってきているため、離家という選択肢をポジティブに捉えている人もいた。このことから、非離家経験者は就職活動の時から急速に自立への気持ちが加速して形成されていくと考える。また離家経験者の中でも、寮という形での離家を経験している人は、就職による不安から親元へ戻ることを特に希求していた。一人暮らしと寮暮らしの家賃が同程度であると仮定すると、Cさんの《一人暮らしで起こるだろう日常生活の不安》のように一人暮らしを送ることへの不安から寮での生活を選択しているであろう。そのため、寮生活を選択した人は、一人暮らしの人に比べ不安感が強く、就職活動には不安も伴うため、親元へ戻りたいという気持ちが強まったのではないかと考える。このことから、離家経験者の方が離家によって自立意識がゆっくと形成されていき、就職活動前までは非離家経験者に比べて、自立意識を持っていると考えられる。だが、就職活動時に非常に速いスピードで非離家経験者が自立意識を形成する一方、離家経験者はAさんのように4年生になって、ある程度将来のビジョンが確定するまでは、不安感が起こり親元へ戻りたい、甘えたい気持ちが増幅し、自立意識形成がストップもしくは後退すると考えられる。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究の調査協力者は8名であるため、本研究で得られた結果の汎用性は完全には認められないと考える。そのため今後の課題としては調査協力者を増やし、調査参加者の年齢、家族構成、離家の種類などを統一し、より細かい類型で調査をすることが望ましいと考える。また本研究は調査者の主観が大きく作用する研究方法であるため、調査者の出したテーマや結果が調査参加者の語りと大きなずれが無いか複数人で検討したり、今回行った研究を第一研究とし、第二研究で同じ調査参加者に第一研究で得られた結果が正しいか質問紙調査法などを使い調査をすることでより客観性の保たれた研究になると考えられる。

付記

本稿は、2018年度跡見学戦女子大学人文科学研究科臨床心理学専攻の修士論文「女子大学生の“離家”の有無による親子関係意識の違いについて」の一部をもとにまとめたものである。

謝辞

本研究を実施・執筆するにあたり、指導教授である野島一彦先生から一方ならぬご指導をいただきました。深く感謝いたします。また、学生へ調査を実施するにあたり、インタビュー調査のお願いを配布する機会を下さった先生方にも貴重なお時間を頂き、御礼を申し上げます。最後に、調査にご協力頂いた8名の対象者の方には貴重なお時間を頂き、大事なお話をお聞かせくださったことを感謝いたします。

引用文献

- 独立行政法人日本学生支援機構 (2016) 平成26年度学生生活調査. 平成26年度学生生活調査結果 (2016年3月). https://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/gakusei_chosa/_icsFiles/afieldfile/2017/06/16/data14_all. (2018年7月20日取得)
- 伊賀 光屋 (2013). 解釈的現象学的分析 (IPA) の方法論 Methodology of interpretative phenomenological analysis (IPA) 新潟大学教育学部研究紀要, 6, 169-192.
- 北村安樹子 (2000). 成人未婚者の離家と親子関係——親元に同居する成人未婚者のライフスタイルと親子関係の規範—— LDI report, 128, 22-45.
- 国立社会保障・人口問題研究所. (2016). 第7回世帯動態調査——現代日本の世帯変動——調査研究報告資料, 34, 高坂 康雄・戸田弘二 (2003). 青年期における心理的自立 (I) ——「心理的自立」概念の検討—— 北海道教育大学附属教育実践総合センター紀要, 3, 135-144.
- 野口 康彦 市川 美樹 (2018). 女子大学生の精神的自立と父娘関係——父親の再評価という視点から—— 茨城大学人文社会科学部紀, 3, 27-49.
- 大石 美佳・松永しのぶ・伊藤嘉奈子・鈴木 公基・前野 澄子 (2006). 大学生の自立意識に関する研究 ——自立観、大人観の予備的検討—— 鎌倉女子大学学術研究所報, 6, 81-90.
- 米村 千代 (2008). ポスト青年期の親子関係意識 ——「良好さ」と「自立」の関係——千葉大学人文研究, 37, 127-150.